

様式1【公表】

「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」
平成29年度事後評価資料（実施報告書）

整理番号	J2601		関連研究分野 (分科細目コード)	人文学 (3304)
補助事業名 (採択年度)	境界地域の歴史的経験の視点から構築する新しいヨーロッパ史概念 (平成26年度)			
代表研究機関名	東京外国語大学			
代表研究機関以外の 協力機関	なし			
主担当研究者氏名	篠原 琢			
補助金支出額	(平成26年度) 12,032,712円	(平成27年度) 38,437,374円	(平成28年度) 25,190,000円	(合計) 75,660,086円
(公募応募当初の「事業 計画調書」に記載の) 若手研究者の 派遣計画	(平成26年度) 3人	(平成27年度) 5人 (3人)	(平成28年度) 3人 (2人)	(合計) 6人
若手研究者の 派遣実績	(平成26年度) 2人	(平成27年度) 5人 (2人)	(平成28年度) 3人 (3人)	(合計) 5人
(公募応募当初の 「事業計画調書」に記載の) 研究者招へい計 画	(平成26年度) 2人	(平成27年度) 4人 (2人)	(平成28年度) 5人 (4人)	(合計) 5人
研究者の 招へい実績	(平成26年度) 2人	(平成27年度) 8人 (2人)	(平成28年度) 7人 (3人)	(合計) 12人

(参考)

派遣期間が30日未 満となり、最終的に 若手派遣研究者派遣 実績のカウントから 除外された者(外 数)	(平成26年度) 1人	(平成27年度) 0人 (人)	(平成28年度) 0人 (人)	(合計) 1人
--	----------------	-----------------------	-----------------------	------------

1. 派遣・招へいによる人的交流を通じて得られた成果の達成状況

(1) 事業計画調書に記載した到達目標

(事業計画調書(3-(2))に記載した「研究課題を海外の研究グループと共同して行うことにより、国際研究ネットワークの強化・拡大に関して客観的な指標に基づく到達目標」)

事業計画では到達目標を以下のように掲げた。

「現在、ヨーロッパには国民語によって編成された歴史学研究の体系と並行して、英語をコミュニケーション言語としながら、多言語的でトランスナショナルな研究を意識的に推進する研究所、研究グループが存在する。以上のような研究動向と課題に即して、本研究は、そのような海外研究機関との連携を強化、拡大するものである。国際文化センター(クラクフ)と本学とは既に学术交流協定を締結しており、ウクライナ、沿バルト地域、ベラルーシと三度にわたって「国際移動セミナー」を挙行している。この経験を発展させながら、若手研究者の派遣、定期的な国際会議やワークショップの開催を通じて、研究者の国際的ネットワークの構築を図るとともに、個別研究に加え、共同研究に基づいてヨーロッパ史の叙述を再考する方法論的、概念的考察を英語で刊行することを目標とする。それを基本的プラットフォームとして、連携機関を中心に永続的なヨーロッパ史研究のコンソーシアムを構築することで、国際的に高い水準にある個別研究を持続的にヨーロッパの全体史に総合する機構が生み出されるであろう。」

(2) 上述の到達目標に対する達成状況の自己評価とその理由

【自己評価】

- 期待を上回る成果を得た
- 十分に達成された
- おおむね達成された
- ある程度達成された
- ほとんど達成されなかった

【理由】

本事業は、若手研究者の派遣、連携研究機関からの研究者招聘を計画以上に行ったが、さらに進んで数々の国際会議・国際セミナーを組織・開催することによって、研究者相互に、研究のテーマ、方法論を中・長期的に共有する条件を整えることができた点で、期待を上回る成果を得たと言える。連携研究機関として本研究事業を推進してきた国際文化センター、中央ヨーロッパ大学、欧州大学院大学は、ヨーロッパのなかでも、上にあげた「英語をコミュニケーション言語としながら、多言語的でトランスナショナルな研究を意識的に推進する」代表的な研究機関である。連携研究機関の研究者たちは、ヨーロッパを本拠とするヨーロッパ史の研究者たちだが、「ヨーロッパ史概念の再構築」に向けて、日本の歴史学研究の伝統で培われた比較史の方法や、非ヨーロッパ世界の歴史的経験についての関心を日本側研究者と共有し、研究ネットワークを構築できたことは、特筆に価する。

国際会議は、本学だけでなく、三つの海外連携研究機関でも輪番で開催され、本学で行われた2回の総括会議(2016年3月、2017年2月)には、すべての研究機関から多数の研究者が参加し、研究コンソーシアムの形成に向けた合意がなされた。機関的には、事業期間中に中央ヨーロッパ大学と連携協定を結び、欧州大学院大学とは、現在、今年度中に協定を締結する予定である。国際文化センターとは、すでに学術協力協定を締結しているが、本事業遂行中に、国際会議の開催、国際移動セミナーの開催など、活発な研究協力が行われた。本事業完了後も、2018年夏に、引き続き国際移動セミナーを開催するべく準備が進められている。

様式1【公表】

参考：本研究事業による国際会議・国際セミナーの一覧

1. *Japan looks at Europe*, 2015年3月8日、中央ヨーロッパ大学歴史学部
2. 「ヨーロッパ史における東と西」、2015年3月30日、14:00-19:00、東京外国語大学本郷サテライト
3. 「危機の時代の地政学」、2015年7月25日、15:45-18:00、東京外国語大学本郷サテライト
4. 「帝国とテクノロジー」2015年7月31日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
5. *Print Capitalism in the Russian Empire and Beyond: Making Public Sphere Imperial, National and Transnational* (中・東欧研究協議会第9回世界大会におけるパネル)、2015年8月5日、16:30-18:00、ICCEES IX World Congress
6. 「中東欧・ロシアにおける帝国・宗教・ナショナリズム」(本事業と神戸大学国際文化学研究推進センターが共に主催)、2015年8月10日13:30~17:30、神戸大学大学院国際文化学研究科
7. *Europe seen from abroad*, 2016年2月4日、国際文化センター, Raven House, Krakow
8. 「女性に対する暴力と人種主義的言説」、2016年3月13日、欧州大学院大学歴史文明学部
9. *The TOKYO-BUDAPEST WORKSHOP – The Violence of Memory and the Memory of Violence. A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University*, 2016年3月17日・18日、中央ヨーロッパ大学、Senate Room
10. 「ポーランド現代史の表象」2016年3月19日 14:00-18:00、京都大学文学部
11. 「開かれた社会・対話・中央ヨーロッパ」、2016年3月23日、15:00-18:00、東京外国語大学本郷サテライト
12. *Constructing a new concept of European history from historical experiences of borderlands*, 2016年3月25日、13:00-18:00、東京外国語大学
13. 「帝国とナショナリズム-19世紀における国民形成再論」、2016年5月4日、14:00-18:00、東京外国語大学本郷サテライト
14. 「ハプスブルク帝国史への新しいアプローチ」、2016年5月3日、15:00-18:00、東京外国語大学本郷サテライト
15. 「グローバル史のなかのイタリア史」、2016年5月3日、15:00-18:00、東京外国語大学本郷サテライト
16. 「ヨーロッパ・ユダヤ史における『東』と『西』」、2016年7月8日、10:30-12:00、京都大学人文科学研究所
17. 「帝国とユダヤ人史」、2016年7月16日、15:30-18:30、東京大学駒場キャンパス
18. 「国際移動セミナー：シロンスク・シュレジェン・スレスコ」、2016年8月25日-9月3日、国際文化研究センター、ヴロツワフ大学ほか
19. 「公共圏の境界」、2016年12月5日、欧州大学院大学歴史文明学部
20. 「過去の名付け」、2016年12月7日、欧州大学院大学文明学部
21. *Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History*, 2017年2月4日、11:00 – 18:00、東京外国語大学海外事情研究所

2. 国際共同研究課題の到達目標及びその達成状況

(1) 事業計画調書に記載した国際共同研究課題の研究目的及び到達目標

(事業計画調書(3-(2))に記載した国際共同研究課題の研究目的及び到達目標(「研究の学術的背景」及び「当該研究領域における本研究課題の学術的な特色や独創的な点、及び事業期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか、到達目標とその検証方法」))

以下が、事業計画調書3-(2)に記した到達目標である。

①、②研究の学術的背景と本研究の課題

以下に、本研究が着想された学術的背景に即しながら、本研究の課題および独創性を、ヨーロッパ史の新しい概念の構築に向けて、時代を追いながら述べる。解明すべき課題、および研究の独創性を述べた部分には(波線)を付す。ヨーロッパ中世史研究においては、内陸的ヨーロッパ世界の形成のイメージが修正され、12世紀ルネサンス論に見るように、イスラーム世界に蓄積された学知のラテン・キリスト教世界への翻訳が、ヨーロッパの形成に決定的な役割を果たしたことが明らかにされて久しい。中世から近世にいたる時期においても、ラテン・キリスト教世界は、正教・ルーシ世界、オスマン帝国/イスラーム世界と不断に接触し、相互に文化変容を繰り返した。ルネサンス期はオスマン帝国との政治的・軍事的な対峙の時期だが、同時に集中的に文化的経験が交換された時期でもあった。

さて、近年のヨーロッパ中・近世史研究は、政治的、身分制的、文化的、宗派的文脈によって多元的に構築された帰属意識、政治秩序に焦点を当てている。歴史的正当性の意識に裏付けられ、身分制議会、都市参事会が代表具現したさまざまなレベルの政治秩序(帝国、王国、邦、都市など)、宗派的に定義された「祖国」(宗派共同体、受難と奇跡に表象される地域)、人文主義者たちの「文芸共和国」などが複合的に交錯して、政治秩序が形成されていた。これらの文脈の外延は時として、イスラーム世界、正教・ルーシ世界にまで及んでおり、ヨーロッパ史を考える上で、多元的・複合的な政治・文化秩序を問題にするだけでなく、その外延が接する境界地域の歴史を再検討することは非常に重要な課題である。この過程を明らかにするにあたって、とりわけ美術史研究の成果と方法を援用することが重要である。複数の宗教の接触については、文書記述では宗派的にイデオロギー化される傾向が強い一方、画像史料は、様式やモチーフの宗教・宗派を越えた伝播、循環について雄弁に語ってくれるからである。

近代を特徴づけるのは、市民社会の構想が国民主義的に実現され、政治秩序が国民(Nation)の圏域に収斂する傾向である。それは同時に産業革命のもたらした「大いなる分岐」を経て、西北ヨーロッパが世界に覇権を確立する時代にあたる。啓蒙思想の目的論的歴史像とあいまって、西北ヨーロッパ史は普遍史と癒着して、ヨーロッパ史の主要な語り master narrative が形成された。近代歴史学は、国民史の構想と密接に結びつきながら制度化され、各国民史を世界史の中心としてのヨーロッパ史に配置していった。この過程で、近世における複合性や、ヨーロッパ史の外延の境界性が忘却された。この過程の批判的検討が、境界地域からヨーロッパ史の概念を再構築するプロジェクトの重要な一部分である。近世期の複合的な政治秩序は、19世紀になっても政治的・社会的実践を強く規定しており、近代のこの傾向は近世からの連続性の下に分析しなければならない。本研究の独創性の一つは、近世と近代を架橋した歴史研究にある。また、地中海世界、ヨーロッパ東部の境界性は、その地域の国民形成に強く作用することとなった。

この時期は、海洋植民地帝国を形成した西ヨーロッパ、大陸植民地帝国となったロシア帝国で、植民地・従属地域で獲得された知と経験とが、帝国を循環し、本国中核部の社会に境界地域的な性格を与えた時期でもあった。ポスト・コロニアル研究の成果をヨーロッパ史研究に内在化させ、植民地の経験のヨーロッパへの還流を正しく評価しなければならない。

20世紀の両次世界大戦は、ヨーロッパ東部境界地域の住民構成・人文地理学的景観を断絶させ、相互に重なり、輻輳する政治・文化秩序は物理的に失われてしまった。ヨーロッパ東部におけるナチズムの人種政策、絶滅政策、戦争末期から戦後の住民追放によって、この地域の境界性は破壊された。現代史の破局は総力戦の時代と境界地域の歴史、ヨーロッパ史の発展が交差するところに正当に位置づけなければならない。ヨーロッパ史におけるこの過程は、第二次世界大戦直後ばかりか、海洋植民地帝国の再編による人口の移動、たとえばアルジェリア戦争後の「本国帰還」までを視野に入れて考えなければならない。第二次世界大戦がもたらした不可逆的な変化は、冷戦と植民地解放戦争の文脈に引き継ぐことによって、より深く理解されるだろう。第二次世界大戦後、境界地域の歴史は長らく国民史の独占的文脈によって語られることになった。しかし、破局はヨーロッパ史全体に有機的に組み込まなければならない。

冷戦期のヨーロッパ史研究については、これを総合的に把握するために、「東西」ヨーロッパの同時代性を比較研究によって明らかにすることが必要である。「東西」の二分法は、何よりも冷戦期の権力的・知的配置に由来するものだからである。

現代史については、とりわけ、現在展開されている、失われた歴史に対する記憶の政治のメカニズムも解明されなければならない。ヨーロッパ史の新しい概念の構築は、現状の記憶の政治と密接に関連するものである。ウクライナ、ベラルーシといったヨーロッパ東部の境界地域では、現代史における断絶を把握しなければ、記憶の政治に立脚した自立への動きも、ヨーロッパ、ロシアとの関係性も理解できない。

本研究は、過去 10 年の国内外における境界地域にまたがるヨーロッパ史研究の拡大、その質的・量的飛躍を総括しつつ、これを境界地域からヨーロッパ史を考える研究として再編し、新しい地平を模索するものである。

(2) 上述の到達目標等に対する達成状況の自己評価とその理由

【自己評価】

- 期待を上回る成果を得た
- 十分に達成された
- おおむね達成された
- ある程度達成された
- ほとんど達成されなかった

【理由】

本研究は、東部ヨーロッパ、および地中海地域を中心とするヨーロッパ境界地域の歴史的経験に焦点を当てながら、共同研究によって新たなヨーロッパ史の概念を構築することを目的として掲げ、従来のヨーロッパ研究の克服すべき問題点と研究目標として次の三点をあげた（事業計画調書 3-(1)、「全体概要」中の「研究の目的及び到達点」）。

1. 目的論的歴史像の克服：普遍的な人類史的価値の実現を体現するものとして目的論的に構想されてきた「ヨーロッパ史」を、世界史の発展に位置づけ直す。
2. 学知における国民主義の批判：ヨーロッパでは 19 世紀の半ば以降、学術研究は国民国家／国民社会のプロジェクトとして制度化、組織化され、それぞれに精緻な知の体系を築きあげてきた。これを批判的に継承して、「ヨーロッパ」の歴史的個性を検討する。
3. 排除された東と南の境界地域の検討：ヨーロッパの東と南の境界地域の経験を「ヨーロッパ史」の構想に有機的に組み込むことによって、ヨーロッパ史の構想を再検討する。

こうした問題意識に立ちながら、ヨーロッパ史の新しい構想を構築することが本事業の研究目的である。招聘・派遣を軸に国内外での合計 21 回にわたって国際会議・ワークショップを開催したが、それらは個別のテーマを扱いながら、この三点を批判的に検討するという課題を基底にして、計画・実施された。この結果、研究事業の全体像が連携研究機関の研究者にも共有され、研究の積み上げが可能となり、国際共同研究として期待以上の成果を上げることができた。以下、その経過を簡単に述べる。

初年度には、主に日本側の研究者と連携研究機関の研究者との個別の交流を基礎に研究協力が進められた。第二年度（H27 年度）以降年度は研究機関どうしの面的な研究協力が進んだ。H27 年度 3 月に本学で行われた国際会議は、上にあげた課題を正面から取り上げ、理論的・方法的な見通しを得ることができた。会議では、研究事業全体にかかわる問題提起に続いて、第一部「ヨーロッパ近代におけるリベラリズム再考」、第二部「ヨーロッパにおける文化遺産と歴史意識」というセクションを設定した。第一部では「目的論的歴史像」を支える自由主義的歴史像の再検討を行い、第二部では、現代史における「記憶の政治」の課題を論じた。これらはヨーロッパ史概念の再構築を行おうとする本研究事業の研究面での大きな成果であり、最終年度を前にして、理論的方向性が定まったことの意味は大きい。国外では、国際文化研究所で「内と外から見るヨーロッパ史」（2016 年 2 月）、中央ヨーロッパ大学で「記憶の暴力・暴力の記憶」（2016 年 3 月）という大規模な国際会議を開催することができた。これらの会議では、日本側研究者と連携研究機関の研究者の研究報告を通じて、研究上の相互交流が実現しただけでなく、研究事業計画全体の問題関心を連携研究機関の研究者と共有し、研究ネットワークの拡大・深化をはかることができた。「記憶の暴力・暴力の記憶」は本学における総括会議とともに、ヨーロッパ史概念の再構築に向けて、現代史における歴史と記憶の問題に取り組んだものである。

最終年度（H28 年度）は、個別研究の進展の上に、上記の三点を批判的に検討して、ヨーロッパ史概念を再考しようとする全体像が示された。最終年度は、研究事業全体が共有され、研究成果があげられた段階として総括することができる。この間、国民史的に構成されたヨーロッパ史に対する批判的検討は継続して行われてきたが、ネイション形成と帝国的編制との親和性を解明したことは、特筆される。

2017 年 2 月に本学で行われた国際会議は、上にあげた課題を正面から取り上げながら世界史叙述のな

様式1【公表】

かでのヨーロッパ史の中心性を批判的に検討し、近世、19世紀史、現代史のそれぞれのセクションで成果が発表されるとともに、豊かな議論が行われ、研究上の次の課題が示された。「ポスト・コロニアル研究の成果をヨーロッパ史研究に内在させる」、という課題についての研究や、グローバル史との接合の見通しも、この会議で得られた成果であった。

最終年度には、計画通り、ポーランド・チェコ・ドイツにまたがって大規模な国際移動セミナーが実施された。国際移動セミナーは、研究チームが移動しながら、各地の研究者とセミナー・会議を重ねていくもので、宗派・言語・国境が錯綜した地域の現場で、研究を鍛えていくことができたのは大きな成果であった。歴史研究者以外にも、地域の宗教指導者や、文化財保全の研究・実務担当者などとの交流によって、本研究事業の現代性を確認できたことも重要である。移動セミナーは当初計画以上に大きな研究の進展をもたらした。これらの国際会議の成果は、中央ヨーロッパ大学、欧州大学院大学、国際文化センターと本学の協力の下に出版が予定され、今後の研究コンソーシアムの礎石として位置づけられることになる。

以上の点から、研究課題の到達目標に対して、期待以上の成果を上げることができたと総括することができる。

3. 今後の展望について

これまでの実施状況を踏まえて、事業実施期間終了後の展望について記入して下さい。

- ① 自己資金、若しくは他の競争的資金等による海外派遣・招へいの機会を含む若手研究者の研鑽・育成の事業の継続（又はその見込み）状況

本事業が、日本のヨーロッパ史研究、および広く人文諸科学の研究に貢献するばかりでなく、ヨーロッパ史研究をグローバルな歴史研究に結びつけていくことを目的とするなら、本研究の問題設定、および研究成果を、ヨーロッパの代表的な研究機関で公表し、広く現地研究者と共有することが重要である。国際会議は、派遣中の若手研究者を中心に組織され、若手研究者、現地研究者、そして本研究の研究分担者の報告によって構成された。こうした事業は、日本の西洋史研究のプレゼンスを高めるだけでなく、将来にわたって、若手研究者のネットワーク構築に貢献することになるだろう。本学のサバティカル制度や、科学研究費補助金などの資金によって、今後、若手研究者が研究ネットワークを拡大・深化させていくことがおおいに期待される。

- ② 本事業の相手側を含む海外の研究機関との研究ネットワークの継続・拡大（又はその見込み・将来構想）状況（組織において本事業で支援した若手研究者に期待する役割も含めて）

本事業の実施によって、欧州大学院大学、中央ヨーロッパ大学、国際文化センターとのあいだに、コンソーシアム的な機関連携を構築することができた。これらの研究機関は、英語を媒介としながら、ヨーロッパの代表的な研究者・研究機関と厚いネットワークを有しており、本事業によって得られた連携関係を足がかりにしながら、新たな研究協力体制を拡大・構築することができる。国際文化センターとは、2016年に実施した「国際移動セミナー」を継続し、2018年夏に次回セミナーを実施する合意が得られている。中央ヨーロッパ大学歴史学部からは、本学資金で継続的に研究者を招聘し、共同研究、および招聘教員としての教育活動を行うことになっている。H29年度は、本事業でも大きな役割を果たしたマティアス・リード教授の招聘が決定している。欧州大学院大学とは、本研究事業を継続しながら、ピーター・ジャドソン教授、ルーシー・ライアル教授を中心に、「グローバル・ヒストリーのなかのヨーロッパ史」という研究プロジェクトを準備中である。これらの研究事業計画には、本学が拠点の科学研究費補助金による研究プロジェクトなどがかわり、その計画・実施においては、若手研究者が海外研究機関との窓口となって、中心的役割を果たすことが期待される。

- ③ 本事業で支援した若手研究者の研究人材としての将来性について

本事業の実施を通じて、国際共同研究を構築する上で、若手研究者の研究能力（発信力）、組織能力は飛躍的に向上した。若手研究者は、それぞれの研究者が留学などで研究滞在を経験したことのない研究機関に派遣されたことによって、研究の枠組みや、発信の方法について、歴史研究全般、あるいは人文学全般のより広い文脈で個別研究・共同研究を行う経験を持つこととなった。派遣された若手研究者は、事業期間中から活発に研究成果を英語、または他のヨーロッパ諸言語で発信しており、今後も国際的な水準で研究を遂行することが大いに期待される。

資料1 実施体制

① 日本側研究グループ事業実施体制

フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名 (身分)	専門分野	備考
主担当研究者 シノハラ タク 篠原 琢	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	中央ヨーロッパ近現代史	H27 に若手研究者から担当研究者に変更
担当研究者 カナイ コウタロウ 金井 光太郎	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	アメリカ合衆国史	
チバ トシユキ 千葉 敏之	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	ヨーロッパ中世史	
ソウマ ヤスオ 相馬 保夫	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	ドイツ現代史	
ハヤシ カヨコ 林 佳世子	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	オスマン帝国史	
タツミ ユキコ 巽 由樹子	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	講師	ロシア近代史	
若手研究者 クメ ジュンコ 久米 順子	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	准教授	ヨーロッパ中世美術史	
フクシマ チホ 福島 千穂	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	講師	ポーランド=リトアニア史	
イトウ タカシ 伊東 剛史	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	准教授	イギリス近代史	
オダワラ リン 小田原 琳	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	講師	イタリア近代史	
スズキ ケンタ 鈴木 健太	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	特別研究員	ユーゴスラヴィア現代史	
計 11 名					

資料2 双方向の人的交流にかかる資料

(1) 若手研究者の選抜方針・基準、選抜方法の概要

若手研究者の選抜にあたっては、以下の方針・基準をもって臨んだ。

1. 研究テーマが、本研究課題の遂行に合致していること。
2. 英語によって研究を発信し、共同研究を行う能力のある者。
3. 派遣中、または派遣後に、派遣された連携研究機関で、本研究事業にかかわる国際セミナー・会議を組織する能力のある者。
4. 研究成果を英語による論文で公開することのできる者。
5. 直近の2年間に、研究能力を示す十分な研究成果のある者。

(2) 派遣及び招へいの支援体制の概要

(日本側からの派遣者及び連携機関からの招へい者に対して組織としてどのようなバックアップ体制をとったかについて記載してください。)

【派遣者に対する支援体制】

本学は、世界各地域の地域研究を研究・教育課題の本義としているため、研究協力課、国際化拠点室を中心に、支援体制を構築した。派遣者の授業負担分については、本学経費で非常勤講師を雇用し、これを補った。

【招へい者に対する支援体制】

上記と同様、研究協力課、国際化拠点室を中心に支援体制を構築した。受け入れにあたっては、研究分担者が滞在計画を作成し、宿舍の確保などを行った。

(3) 若手研究者の海外派遣計画及び研究者の招へい計画の見直し(増減)状況とその理由

【派遣計画】

派遣者①の巽由樹子講師は、2回に分けて中央ヨーロッパ大学に派遣される予定だったが、健康上の理由から2回目の派遣は行われず、本研究事業での位置付けは、「若手研究者」から「研究分担者」に変更された。

【招へい計画】

H27年度に招聘が予定されていたモニカ・ムジン=クピシュ准教授は、国際文化センターからクラクフ経済大学へ所属が変更となったため、招聘を中止し、かわって、ウカシュ・ガルセク研究員、モニカ・リディゲル研究員を招聘した。また最終年度の総括会議に招聘を予定していた国際文化センター所長のヤツェク・プルフラ教授は、2017年6月にクラクフで開催されたユネスコ世界遺産会議の議長を務めることとなったため、来日が不可能となった。

研究の進展、機関間の連携の強化の結果、当初計画にはなかった以下の研究者が招聘されることになった。

- ・国際文化センター
 - ウカシュ・ガルセク研究員
 - モニカ・リディゲル主任キュレーター
- ・中央ヨーロッパ大学
 - マティアス・リードル教授
 - マーシャ・シーフェルト教授
 - コンスタンティン・ヨルダッキ教授
 - ヤン・ヘニングス准教授
- ・欧州大学院大学
 - ルーシー・ライアル教授

(4) 若手研究者が果たした役割にかかる成果の概要

① 派遣された若手研究者の成果

(資料4に記載するような研究成果の発信状況等だけではなく、国際共同研究における役割を含め、将来的に当該研究領域において中核的な役割を担う活躍が見込まれるか等の観点も含めて記載してください。)

本事業が、日本のヨーロッパ史研究、および広く人文諸科学の研究に貢献するばかりでなく、ヨー

ロッパ史研究をグローバルな歴史研究に結びつけていくことを目的とするなら、本研究の問題設定、および研究成果を、ヨーロッパの代表的な研究機関で公表し、広く現地研究者と共有することが重要である。国際会議は、派遣中の若手研究者を中心に組織され、若手研究者、現地研究者、そして本研究の研究分担者の報告によって構成された。こうした事業は、日本の西洋史研究のプレゼンスを高めるだけでなく、将来にわたって、若手研究者のネットワーク構築に貢献することになるだろう。本学のサバティカル制度や、科学研究費補助金などの資金によって、今後、若手研究者が研究ネットワークを拡大・深化させていくことがおおいに期待される。派遣者②の福島千穂講師は、国際文化センターにおけるセミナーの組織、国際移動セミナーの準備に中核的役割を担った。派遣者③の鈴木健太、派遣者⑤の伊東剛史准教授は、中央ヨーロッパ大学で行われたセミナーの組織の中心となるとともに、研究成果の報告を行い、連携機関の研究者との共同研究を構築している。派遣者④の小田原琳講師、派遣者⑥の久米順子准教授は、ともに欧州大学院大学での三回にわたるセミナーの組織の中心となり、報告を行った。

以上、派遣された若手研究者は、派遣先の研究機関で、本研究事業にかかわる研究を個別に推進するばかりでなく、研究事業全体にかかわる国際会議・セミナーの組織を通じて、共同研究を充実させ、連携研究機関とのネットワークの構築に重要な役割を果たした。

② 派遣・招へいした機関・組織の成果

(機関等として組織的に若手研究者や招へい研究者を支援する枠組みが構築されたか、機関等の研究者の評価において、海外での研究実績を重視するシステムが構築されたか、また本事業による派遣・招へいが今後も維持・継続されるか等の観点も含めて記載してください。)

本事業の実施によって、欧州大学院大学、中央ヨーロッパ大学、国際文化センターとのあいだに、コンソーシアム的な機関連携を構築することができた。これらの研究機関は、英語を媒介としながら、ヨーロッパの代表的な研究者・研究機関と厚いネットワークを有しており、本事業によって得られた連携関係を足がかりにしなが、新たな研究協力体制を拡大・構築することができる。国際文化センターとは、2016年に実施した「国際移動セミナー」を継続し、2018年夏に次回セミナーを実施する合意が得られている。中央ヨーロッパ大学歴史学部からは、本学資金で継続的に研究者を招聘し、共同研究、および招聘教員としての教育活動を行う。H29年度は、本事業でも大きな役割を果たしたマティアス・リードル教授の招聘が決定している。欧州大学院大学とは、本研究事業を継続しながら、ピーター・ジャドソン教授、ルーシー・ライアル教授を中心に、「グローバル・ヒストリーのなかのヨーロッパ史」という研究プロジェクトを準備中である。

(5) 若手研究者の派遣実績の詳細【氏名のみ非公表】 ※派遣者毎に作成すること。

派遣者②： 講師

研究滞在中は、「近世ポーランド・リトアニア国家の東部地域における教会合同の影響」を調査課題とし、派遣先である国際文化センター（ポーランド、クラクフ市）を主な研究活動の場とした。クラクフではまた、ヤギェロン大学の図書館と歴史学研究所にも定期的に通うほか、ポーランド教養アカデミーにおいて開催された学会・シンポジウムを聴講し見識を深めた。

ラテン・カトリック文化圏と東方キリスト教圏が重なりあう東中欧の境界的性格を体現する合同教会はガリツィア（ポーランド分割後にオーストリア領となった地域）でとりわけ飛躍的發展を遂げたが、クラクフにはガリツィアの拠点都市であったという土地柄から関連情報の蓄積が大きい。研究対象は厳密には近世（特に17世紀における合同教会の宗派形成と、その過程でのラテン化問題）であるが、クラクフ滞在中には地の利を活かして教会合同の近現代におよぶ長期的影響を考察対象に加えた。

(具体的な成果)

春から夏にかけては、近世ポーランド・リトアニアの教会合同の史料訳と解説から成る『ブレスト教会合同』（群像社、2015年12月29日刊）の執筆に多くの時間を充てたが、ヤギェロン大学歴史学研究所教授ヴォイチェフ・クラフチュク氏の助力を得て、執筆のために参照を要する多くの文献資料にアクセスすることができた。教養アカデミーで開催された学会では、ポーランドや近隣国の研究者（特にウクライナのイホル・スコチリヤス、ユーリー・ザズリャク両氏）から、同テーマについての昨今の研究動向をうかがい知ることができた。造形芸術や建築の専門家、専門書を多数擁する国際文化センターは図版資料を調査するのに最適な場所であり、前掲書に使用した図版を選択する際にはミハウ・ヴィシニェフスキ氏はじめ当センター研究員のかたがたに照会を行った。

初秋には国際文化センターで開催された行事、文化財・文化遺産に関する国際フォーラム（3rd Heritage Forum）やサマースクール（European Campus of Excellence）に参加し、歴史的遺産の保存活動や活用に関する最先端の取り組みについて学んだ。こうした機会に得られた情報は、クラクフ滞在中に文献調査や史料収集と並行して行ったカルパチア山地での実地調査をより充実したものとした。ガリツィアでは合同教会の発展とともに数多くの聖堂が建造され、第二次大戦後のポーランドで教区が廃止されていた期間にも、相当数の聖堂が他宗派に転用されることで生き延びることができた。そうした聖堂はクラクフのあるマウォポルスカ県と東隣のポドカルパチエ県の各地に点在し、特にウクライナ、スロヴァキアとの国境地帯であるカルパチア山地には貴重な木造建築をふくむ多くが保存されている。それらを訪ねて来歴を調査することで、教区レベルでのミクロな歴史を確認することができた。

冬には、国際文化センターと東京外国語大学との共催による国際セミナー「Europe seen from abroad」（国際文化センター、2016年2月5日）へ向けて準備を行った。当セミナーには報告者の一人として参加し、「ルーシ」概念の歴史の変遷とその表記における問題を、ポーランドとロシアにおける用法を比較しつつ検討した。「ルーシ」概念は「歴史的ポーランド」とロシアの主張する「ルーシ世界」とが重なりせめぎあう境界地域の宗派的アイデンティティ（のちにはナショナル・アイデンティティとも）に関わる問題であるが、報告ではこの地域における教会組織の歴史に焦点を当てて考察した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、ヤツェク・プルフラ教授	33日	309日	0日	342日

派遣者③：日本学術振興会特別研究員(当時、現特別研究員)

2015年3月末に開始された海外派遣のもと、2016年3月中旬まで、派遣先機関で客員研究員として研究活動に従事した。主として、本事業の大枠の主題である新たなヨーロッパ史概念の構築をめざし、ユーゴスラヴィアや東欧の社会主義体制末期の時代に関する個別研究を進めるとともに、本事業の推進にあたっての国際的な研究ネットワークの形成を準備することに取り組んだ。その際、派遣先機関では、定期的に研究者との面会を実施しつつ、また同機関で開催された講演会やセミナーに参加しながら、個別研究への新しい知見や視点を獲得すると同時に、研究交流の進展を図った。

研究活動における個別研究では、20世紀終盤の社会主義体制崩壊におけるナショナリズム（国民主義）の力学について、その直後に再び境界地域の破壊と断絶が生じたユーゴスラヴィアの経験を中心に再検討する課題を進めた。そしてその検討を通じ、ヨーロッパ（東部）境界地域に共通する社会主義期とその終焉を、ヨーロッパ史の文脈のなかに位置づけることに取り組んだ。その内容は、より具体的に下記の3つに分けられる。対象地域は旧ユーゴスラヴィア地域のなかでもとくにセルビアを扱った。

a) 中東欧の社会主義体制末期の大衆運動とナショナリズム

1989年以降に中東欧諸国で生じた一連の社会主義体制崩壊と当時のユーゴスラヴィアにおける社会変動について、個別事例の分析を踏まえながら、大衆運動とナショナリズムの関係という共通の視座から再検討した。

b) ナショナリズムをめぐる共産党指導部内の議論とその対立

a)を補完する課題として、1980年代末のユーゴスラヴィアにおける大衆運動の展開とナショナリズムの高揚の背景を理解するため、当時の体制を先導した共産党指導部がそうした事態をどのように捉え、またいかに対処したのかについて、セルビアの指導部を事例に考察した。

c) 20世紀ヨーロッパにおける境界地域の諸相

研究対象の地域をより多面的に理解する取り組みとして、20世紀のより長い時代設定のなかで、周辺との境界をなす（なした）都市や名所を取り上げ、それらの歴史的経験を俯瞰的に捉えながら、境界地域の歴史像に接近することを試みた。

(具体的な成果)

以上の活動を通じて、派遣先の研究者との協力関係を進展させるとともに、個別研究および本事業全体の積極的な展開を図り、一定以上の成果がもたらされた。定期的実施した研究者との面会では、研究を進める上での有意義な意見交換を行うことができた。なかでも受入研究者であるバラージュ・トレンチュエニイ准教授との研究交流では、その民族（国民）横断的に、かつヨーロッパを俯瞰する圧倒的な視座から、個別研究をより広い同時代の文脈、そして事業全体の課題であるヨーロッパ史の概念に位置付ける有益な示唆を得た。またヴラディミール・ペトロヴィチ客員教授とは、世代と専門、対象時代が近いことも幸いし、互いの研究や旧ユーゴスラヴィア地域に関する様々な意見交換を介して研究交流を深めた。本事業全体にとっても、境界地域の「南」からの視座、また現代史における暴力の問題を扱う上で重要な協力関係となったと言える。ペトロヴィチ氏とは、本学と派遣先研究機関とのジョイント・ワークショップの企画に向けて、主題の選定や報告者について何度か研究打ち合わせを行った。その結果、本事業が本年度3月に派遣先機関で共同開催した国際会議「The Violence of Memory and the Memory of Violence」の主題が定まり、企画の着手を見た（氏本人は渡米のためワークショップは不参加）。

このような派遣先でのネットワーク形成、および研究者との協力関係は、上記 a)～c)の個別研究の進展にも寄与した。とりわけ、上述の二氏をはじめとする派遣先の研究者との意見交換を経て、1989年の中東欧諸国の体制変動と同時代のユーゴスラヴィアの事例に関する a)の課題に取り組む意義と重要性を強く再確認した一方、方法論的な批判や「近い」時代を扱うゆえの問題などについての貴重な指摘と助言を得た。a)の研究成果の一部は、報告「Rethinking Popular Movements in Socialist Yugoslavia in the Late 1980's: The Role of "Narod" in the Development of Political Participation in Vojvodina and Serbia」として、本事業が他の海外の連携機関（ポーランド）で開催した国際会議で発表し（Polish-Japan Research Seminar「Europe Seen from Abroad」、本年度2月）、当地の研究者との新たな研究交流を進める機会となった。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
ヨーロッパ・ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、歴史学部、バラージュ・トレンチェーニ准教授	8日	324日	0日	332日
ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、共同セミナー「Europe Seen from Abroad」	0日	2日	0日	2日

派遣者④：講師

本プログラムでの個別研究主題は、ヨーロッパの南の境界としての近代イタリアにおける人種とジェンダーをめぐる歴史叙述である。この課題には、(1)植民地主義、(2)人種主義、(3)ジェンダーという、近代ヨーロッパにおけるきわめて大きな3つの論点が生交している。

イタリアの植民地主義については、戦後長らく一部の研究者をのぞいて活発な生産が行われているとは言い難い分野であったが、英語圏でのポストコロニアル・スタディーズなどの影響を受け、イタリアでも非常に重視されつつある分野である。EUIでは近代ヨーロッパの植民主義を通してのグローバル化をめぐる研究を進めるルーシー・ライアル教授と研究を推進し、帝国主義以前の植民者たちの活動や、美術品など物の流通を通じての植民地主義理解、植民地主義とグローバル・ヒストリーという歴史叙述の可能性の関係、またイタリア近現代史における文学や美術における「国民」の表象と人種主義の関係などの論点を議論することができた。とくに人種主義は、ヨーロッパにおける今日の大規模な移民現象や難民危機を契機として注目を浴びている分野だが、イタリアでは十分な蓄積があるとは言えない。この点で、EUI派遣を通じて直接学び対話することができたことは貴重であった。

このように、植民地主義、人種主義に関する研究が発展しつつある一方で、それと密接に関わり交差するジェンダーの問題については、まだ十分な議論がされているとは言えないことが、共同研究を遂行するなかで発見された。植民地主義や人種主義をめぐる言説空間で、女性が、その生殖機能ゆえに人種の「境界」上にある、「危険な存在」と見なされてゆくこと、またそれがどのような現実として結実してゆくかについては、歴史研究においてはまだ十分に指摘・検討されていない論点である。この点では、ライアル教授だけでなく、パヴェル・コラーシ教授やピーター・ジャドソン教授、またCEUのバラージュ・トレンチェーニ教授とも、今後の共同研究に向けて研究交流を密に行なった。

とりわけ第一次世界大戦は、参戦運動等を通じて女性が「国民化」されると同時に、「敵」による性暴力の被害者となることで、逆説的にイタリア国民という「人種」に害をおよぼす存在として「人種化」されるという二重の意味を付与される契機となった。このことは植民地における宗主国イタリアの男性たちと現地女性との関係や、第二次世界大戦末期の連合軍やドイツ軍によるイタリア女性に対する加害とその後など、きわめて長い視野をもちうる問題であることが明らかになったことは、本プログラムの大きな成果であり、また今後の課題である。これを遂行するにあたり、上述の研究者たちとの持続的な研究ネットワークの形成はきわめて大きな意義があった。このネットワークの維持・発展も、合わせて今後の課題としたい。

(具体的な成果)

上述の成果の一部は、Rin Odawara, 'Violence against women and the racist discourse during the WWI in Italy' in *Quadrante*, No. 18, March 2017 および小田原琳「〈境界〉を創りだすカ—南イタリアから立てる近代への問い」東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のために—現在をどう生きるか』（岩波書店、2017年）として発表した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	

イタリア・欧州大学院大学・歴史文明学部・ルーシー・ライアル教授	0日	196日	148日	344日
米国・ニューヨーク、ニューヨーク大学（ワークショップ）およびフオーダム大学（意見交換）	0日	4日	0日	4日
ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、共同セミナー「Europe Seen from Abroad」	0日	2日	0日	2日
ヨーロッパ・ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、国際会議「The Violence of Memory and the Memory of Violence」	0日	4日	0日	4日
ヨーロッパ・フランス・パリ社会学政治学研究センター(研究打合せ、史料調査)	0日	0日	2日	2日
ヨーロッパ・フランス・イスラーム文化センター(研究打合せ・史料調査)	0日	0日	1日	1日
ヨーロッパ・オーストリア・ウィーン大学(研究打合せ、史料調査)	0日	0日	2日	2日

派遣者⑤：准教授

<p>主に研究対象とする地域は、本研究課題においてヨーロッパ北西部の「境界地域」に位置付けられるイギリスである。比較史と関係史の関係から、派遣者は次の3つのテーマについて、中央ヨーロッパ大学などの海外研究者と連携し、研究を行った。</p> <p>(ア) ヨーロッパ史の文脈における近代イギリス科学の制度化と専門化 (イ) 帝国経験・植民地経験のイギリス史への還流 (ウ) 多層的ヨーロッパにおける科学拠点の比較史 (具体的な成果)</p> <p>(ア) は、イギリスにおける自然科学の制度化・専門化を、大陸ヨーロッパとの比較を念頭においたうえで明らかにしようとするものである。CEU所属の Dr. Emese Lafferton (Assistant Prof.)から得られた知見などを取り入れ、研究成果として、Takashi Ito, 'The state and the popularisation of science in Victorian Britain: The Scientific and Literary Societies Act of 1843', <i>Historia Scientiarum</i> 25/3 (2016): 216-251 を発表した。同論文により、2016年度日本科学史学会論文賞を受賞（2017年6月に授賞式・内示あり）。</p> <p>(イ) については、イギリスの帝国的展開が、科学研究に及ぼした影響を明らかにすることが大きな目標となる。そこで、報告者は19世紀イギリスを代表する科学者としてチャールズ・ダーウインを選び、ダーウインの帝国経験が彼の科学研究に及ぼした影響を分析した。この成果は、伊東剛史、後藤はる美編『痛みと感情のイギリス史』（東京外国語大学出版会、2017年）としてまとめられた。</p> <p>(ウ) は、ヨーロッパ域外も含めた様々な科学研究拠点の形成を、比較と関連性の視点から明らかにすることである。CEU所属の Marianna Szczygielska (Ph.D. candidate) とともに、マクマスター大学（カナダ）で開催された国際ワークショップ Zoo Studies and A New Humanities に参加した。この成果は、国際共著論集としてまとめられ、トロント大学出版会より出版予定である。</p>				
派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
中央ヨーロッパ大学・歴史学部・バラージュ・トレンチェーニ教授	0日	175日	140日	315日

ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、共同セミナー「Europe Seen from Abroad」	0日	2日	0日	2日
ヨーロッパ・ドイツ、フランクフルト動物園・ゼンケンベルク博物館・聖書博物館（資料調査）	0日	4日	0日	4日
ヨーロッパ・英国、ブリティッシュ・ライブラリー（資料調査）	0日	1日	3日	4日

派遣者⑥：准教授

ヨーロッパ中世美術史を専門とする立場から、画像史料を有効に用いつつ、ヨーロッパ境界地域、とりわけ中世地中海地域における歴史的経験の循環を明らかにすることを目標としている。具体的には、1)キリスト教世界とイスラーム世界の接触が中世地中海地域の美術・建築にどのような影響を及ぼしたか、2) そうした現象が近現代のヨーロッパで構築された「美術史」の言説においてどのように語られてきたか、という2つの観点から作品および先行研究の収集と分析を行うこととした。

2016年3月にフィレンツェの欧州大学院大学の歴史文明学科に到着し、Visiting Fellowとして一年間受け入れてもらった。滞在中はおもに同大学図書館と、フィレンツェ市内にあるドイツ美術史研究所図書館を使って研究を行った。英語を公用語とする欧州大学院大学図書館は、JSTOR, ProQuest など英語圏の主要な学術雑誌のデータベース類が非常に充実しており、欧州の境界地域とくに地中海地域における芸術的モチーフの還流について、もっぱら英語で発表された近年の論文を渉猟するために理想的な環境であった。ドイツ美術史研究所は、対照的に、言語を問わず美術史・考古学に関する書籍・雑誌が幅広く揃った伝統ある専門図書館であり、英語以外で書かれた先行研究や古典的な研究等にあたることができた。

(具体的な成果)

1)キリスト教世界とイスラーム世界の接触が中世地中海地域の美術・建築にどのような影響を及ぼしたかという点に関しては、6月にスペインのリエイダ大学で開催された中世国際学会に参加し、イベリア半島のキリスト教王国でムスリム工人により建てられたいわゆる「ムデハル建築」について英語で発表を行った。続いてリエイダおよびタラゴナで作品の現地調査を行い、その成果を一部盛り込むかたちで、リエイダ大学中世研究サマースクールで口頭発表を行った。合宿形式のサマースクールでは、スペイン、イギリス、アルゼンチンなどで活躍する西洋中世学研究者と有意義な情報交換・意見交換を行うことができた。

2) キリスト教美術とイスラーム美術の接触が「美術史」という学問領域でどのように語られてきたかという点を検証した成果は、まず9月にマドリッドで開催された国際学会で口頭発表を行った。「ヨーロッパ＝キリスト教世界」かつ「スペイン＝ヨーロッパ」という19世紀スペイン知識人たちの自己認識のもとでスペイン・イスラームという過去が巧妙に矮小化される一方、「ヨーロッパ」内における独創性、スペインをスペインたらしめるスペイン性の発現の一例としてまさしく「ムデハル美術」が20世紀初頭に注目を集めたという錯綜した状況を、主要な「ムデハル美術」研究を辿りながら提示した。

一方、スペイン以外の地中海地域におけるキリスト教美術とイスラーム美術の接触についても継続的に作品調査と文献収集を行った。その結果、近似した現象が地中海地域全体で観察し得ること、しかしこの地域が国民国家に分断されていく過程で、そうした現象は各国のナショナリズムの言説のなかに取り込まれていったことが明らかとなった。近年のいわゆるグローバル志向の文化史は、国別、言語別に編纂されてきた狭義の美術史を乗り越える契機となり得るが、高度に専門化された先行研究を幅広い地域と年代に渡って把握する難しさを実感した。ともあれ、以上の研究成果の一部は、12月7日に研究滞在先である欧州大学院大学歴史文明学科の研究コロキウムで口頭発表する機会を得た。本頭脳循環プログラムの主宰者である篠原琢先生の欧州大学院大学での発表と日が近かったため、プログラムメンバーの中から篠原琢先生と小田原琳先生の出席を得ることができた。欧州大学院大学での受入教員であるパヴェル・コラーシ博士をはじめ歴史文明学科に所属する研究者たちからも今後の研究にきわめて有益な質問や示唆を得られた。

※ 派遣先 ※ (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
ヨーロッパ・イタリア、欧州大学院大学、歴史＝文明学部、パヴェル・コラーシ教授	0日	21日	308日	329日
ヨーロッパ・ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、国際会議「The Violence of Memory and the Memory of Violence」	0日	4日	0日	4日
ヨーロッパ・スペイン・リエイダ大学(国際学会「The 6th International Medieval Meeting Lleida」「XXI Cátedra de los estudios medievales del Comtat d'Urgell」参加・成果発表・意見交換)	0日	0日	13日	13日
ヨーロッパ・スペイン・スペイン国立高等科学研究 院 (国 際 学 会 「 XVIII Jornadas Internacionales de Historia del Arte」参加・資料調査)	0日	0日	5日	5日

準派遣者： 講師

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

2015年4月－10月に、中央ヨーロッパ大学歴史学部で客員研究員として、次のような研究活動を行った。(1) 6月29日－7月4日にかけて開催された科学史のサマーユニバーシティ「Cities and science: Urban History and the History of Science in the Study of Early Modern and Modern Europe」にアプライして採用され、研究発表を行った。それにより、近代ヨーロッパの諸都市で流行したポピュラーサイエンス雑誌と科学知の普及について、比較考察するのに有用な多様な知見を得た。(2) 8月初旬に東京で開催されたICCEES (国際中欧・東欧研究協議会) 大会において、「Print Capitalism in the Russian Empire and Beyond: Making Public Sphere Imperial, National, and Transnational」とのタイトルでパネルを組織し、中央ヨーロッパ大学からマーシャ・シーフェルト准教授を招聘した。シーフェルト氏と私は、ヨーロッパ発のユニバーサルな型式(活字、サイズ、紙質など)、技術(電信、鉄道など)および商慣行(人材の往来、多国籍出版企業の存在、それとロシア企業との合弁など)が、ロシア出版の一国主義的性格よりも帝国性を強めたのではないかという点を論じ、ヨーロッパ文化とロシア文化の比較という観点から、「ヨーロッパとは何か」という問いについて考察を深めた。(3) 近代ロシアの評論家と出版メディアに関する論文を寄稿した論文集*Obshchevennost' and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia: Interface between State and Society*が、2015年秋に刊行された。これについて中央ヨーロッパ大学の研究者と議論ができたこと、また、CEUの講義用文献リストに収録され、大学図書館に收藏されたことは有意義だった。(4) 帰国後、2016年3月および2017年1月には、CEU、EUI、国際文化センターの研究者を招聘して開催された国際シンポジウムで、ディスカッサントを担当した。とりわけ、CEUのトレンチャーニ准教授による近代中欧におけるリベラリズムとナショナリズムの不可分性についての報告からは、近代ロシア史との比較の観点を得ることができ、ロシアという「境界地域」からのヨーロッパ史の比較考察を深める機会となった。

(具体的な成果)

(1) サマーユニバーシティの研究報告として、Yukiko TATSUMI “Popular Science and Late Imperial Russian History,” Summer University “Cities and Science: Urban History and the History of Science in the Study of Early Modern and Modern Europe” (2015年6月、中央ヨーロッパ大学(ブダペスト)、口頭発表、審査あり)を行った。

(2) 国際学会での報告として、Yukiko TATSUMI, “Non-Russian Publishers and Russian press in the Russian Empire,” in the panel “Print Capitalism in the Russian Empire and Beyond: Making Public Sphere Imperial, National, and Transnational,” ICCEES IX World

Congress (2015年8月, 幕張、口頭発表、審査あり) を行った。				
(3) 論文としては、Yukiko TATSUMI, “Russian Critics and <i>Obshchestvennost</i> ’, 1840–1890: The Case of Vladimir Stasov,” Yasuhiro MATSUI (ed.), <i>Obshchestvennost’ and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia: Interface between State and Society</i> , London: Palgrave Macmillan, 2015, pp. 16–33, (査読あり) が刊行された。				
派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、歴史学部、 バラージュ・トレンチャーニイ准教授	61日	175日	0日	236日
ロシア、ロシア国立図書館、ロシア地理学協会 (意見交換・資料収集)	0日	4日	0日	4日

(6) 研究者の受入実績の詳細【氏名のみ非公表】 ※招へい者毎に作成すること。

招へい者①： 教授

バラージュ・トレンチャーニ教授は、ヨーロッパの境界地域のネイション形成、ナショナリズム研究について指導的な研究者である。ヨーロッパの16言語に通じ、各国の史学史に詳しく、いくつもの共同研究を通じて、研究ネットワークを構築している。本研究では、主に理論的な諸問題、および比較史の方法の問題を中心に担当した。

トレンチャーニ教授は2016年3月25日に本学で行われた国際会議で「中・東欧における自由主義のトランスナショナルな歴史に向けて」と題する報告を行った。この報告は、自由主義思想によって構築されたヨーロッパ史の規範を批判的に検討するための枠組みを提供するものとなった。中央ヨーロッパ大学で行われた国際会議ではコメンテータとして比較史の可能性を示した。トレンチャーニ教授は、本事業の開始時から、研究計画の策定に携わり、中央ヨーロッパ大学において、本事業を推進する中心的役割をになった。2017年2月4日に行われた総括会議では、近世から現代に至る長い期間について、本研究事業に見通しをあたえる報告を行った。

トレンチャーニ教授は、準備段階より本研究事業に携わり、研究計画の策定、若手研究者の受け入れに中心的な役割を果たし、本学と中央ヨーロッパ大学との連携のかなめとなった。トレンチャーニ教授は、2017年10月より、リード教授の後を襲って中央ヨーロッパ大学歴史学部の学部長となる予定だが、本研究事業の成果を引き継ぎながら、引き続き本学と中央ヨーロッパ大学との共同研究の中核となることが期待される。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー 篠原琢（東京外国語大学）	0日	10日	25日	35日

招へい者②： 教授

2015年3月に東京外国語大学において行われた本研究事業初回の国際会議において、パヴェル・コラーシ氏の報告は、ヨーロッパ史概念から「東」がもっとも疎外された冷戦期について、死刑制度に注目しながら、国家暴力の行使という観点から考えた場合の、「東」を有機的に包括したヨーロッパ史叙述の可能性を提起した。この報告は、本プロジェクトの方向性を決める上で、本質的に重要な貢献となった。ヨーロッパ現代史、とりわけ冷戦期の歴史を東西にまたがって叙述する枠組みの構想を方法的、概念的に発展させる中軸を提供したからである。

最終年度は2017年2月4日に行われた総括会議に出席し、東欧社会主義体制をヨーロッパ史のなかには有機的に位置づけるための提言を行った。

コラーシ教授は、EUIにおける若手研究者の受け入れ教員となっただけでなく、EUIにおける本研究事業の中心となって、EUIでの本研究事業による国際セミナーの組織、運営を行い、またEUIから本学に研究者を招聘する際に、研究者の推薦を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
欧州大学院大学、歴史＝文明学部、イタリア 篠原琢（東京外国語大学）	5日	1日	7日	13日

招へい者④： 教授

ジャドソン教授は、19世紀ハプスブルク帝国史研究、19世紀のリベラリズム研究に革新をもたらす研究を行ってきた。現在は、欧州大学院大学で広く近代ヨーロッパ比較史を担当している。19世紀のヨーロッパ史理解は、ヨーロッパ史の再検討に鍵となる分野であり、ジャドソン教授を招いての共同研究は、本研究に中心軸を与える。本研究では主に近代史の部分を担当した。

ジャドソン教授は、2016年5月に行われた国際会議、「帝国とナショナリズム」で中心的役割を果たし、本事業計画のうち、19世紀の国民社会の形成と帝国秩序に関する研究を大きく進展させた。また、欧州大学院大学歴史文明学部学部長として、EUIにおける本研究事業の推進に大きく貢献した。また、本学と欧州大学院大学との学術交流協定の準備に中心的な役割を果たしている。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
欧州大学院大学・歴史文明学部、イタリア 篠原琢（東京外国語大学）	0日	0日	8日	8日

招へい者⑥： 教授

2015年3月に東京外国語大学において行われた本研究事業第一回目の国際会議において、マティアス・リードル氏の報告は、中近世の政治思想史に即して、ヨーロッパ史における「西」の意味づけを明らかにした。現実には13世紀までビザンツ世界は、西欧に対して文明的・知的に圧倒的な優位に立っていたにも関わらず、宗教的普遍性を代弁する帝國的政体が、その領域的限定性（「西」）を普遍性に投影したのである。報告は今日まで続くヨーロッパ概念の構築の持続性を示した。この報告は、本研究事業のかかげる「ヨーロッパ史概念の再構築」に大きく貢献した。2017年2月に行われた総括会議では、ヨーロッパ史における「東」と「西」の観念を、ヨーロッパ政治思想史のなかで検討し、ヨーロッパ史を構築する空間概念について論じて、本事業の大きな成果となった。

リードル教授は、中央ヨーロッパ大学歴史学部学部長として、中央ヨーロッパ大学と東京外国語大学との研究者循環に中心的役割を果たした。特に、2016年3月に中央ヨーロッパ大学歴史学部で行われた本事業主催の国際会議の計画・組織・実施に中心的役割を果たした。

リードル教授との協議の結果、本事業の成果として、東京外国語大学と中央ヨーロッパ大学との間に学術協定が締結された。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー 篠原琢（東京外国語大学）	6日	2日	11日	19日

招へい者⑦： 研究員

ミハウ・ヴィシュニェフスキ研究員は、中央ヨーロッパにおける文化財保全、都市景観の保全の歴史を専門としており、国際文化センターでは、国際交流を担当している。平成27年度は、文化財保全からヨーロッパの歴史意識を検討することを研究の一つの柱としており、モニカ・リディゲル氏、ウカシュ・ガルセク氏とともに、この課題について大きな貢献をなした。ヴィシュニェフスキ博士は、本研究事業の前提となる「国際移動セミナー」の企画・運営にあたって、国際文化センター側を代表し、2016年8月から9月にかけて行われた「国際移動セミナー：シロンスク」の準備・組織を行うと同時に、全行程に同行し、共同研究・共同調査を行った。

2016年3月に本学で行われた国際会議では、「リヴィウのアルメニア使徒教会」と題する報告を行い、アルメニア使徒教会の修復の実例を通じて、都市景観における記憶の問題、諸文化の衝突の問題について議論した。また京都大学、および本学における国際セミナーで報告を行い、討論に応じた。

また2016年2月に国際文化センターで行われた本事業主催の国際会議の計画・組織・実施に中心的役割を果たした。本学と国際文化センターとの間には、すでに学術協力協定が結ばれているが、本事業の実施により、共同研究が飛躍的に進展し、相互の研究交流が進んだ。ヴィシュニェフスキ研究員はその中心となった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
国際文化センター、ポーランド／篠原琢（東京外国語大学）	0日	15日	0日	15日

招へい者⑧： 准教授

マーシャ・シーフェルト准教授は、ロシアにおける情報技術史を専門としており、中央ヨーロッパ大学で本学の巽由樹子講師と共同研究を行った。
 巽講師との共同研究の成果を2015年8月に行われた国際中欧・東欧研究協議会で、パネルを組織し、報告した。また篠原とともに北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで共同研究の成果を報告するセミナーを開催した。これらは本研究プロジェクトが目指す研究者の国際連携の成果を具体的に示すものとなった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー／篠原琢（東京外国語大学）	0日	13日	0日	13日

招へい者⑨： 教授

コンスタンティン・ヨルダッキ教授は、戦間期から第二次世界大戦時のヨーロッパ、とりわけ東欧の右派急進主義運動／体制、および社会主義期の農業集団化の諸問題を専門としている。本プロジェクトは、ヨーロッパ史が経験した破局を、その境界地域から再考することを重要な課題とするが、この課題にとって右派急進主義運動の展開とその体制の成立の分析は不可欠である。また、社会主義の歴史をヨーロッパの20世紀史に有機的に組み込むことも重要である。

ヨルダッキ教授は、2016年7月に本学で行われた国際セミナーにおいて「歴史的地域の探求：象徴地理学から批判的地政学へ」と題する報告を行い、中央ヨーロッパ概念について批判的考察を行い、本事業が目的とするヨーロッパ史概念の再検討に大きく貢献した。神戸大学で行われたセミナーでは「戦間期における宗教・メシアニズム的ナショナリズム・ファシズム」と題する報告を行い、全ヨーロッパ的な右派急進主義運動共通の特色について検討した。また、3月に中央ヨーロッパ大学で行われた国際会議では、「ルーマニア農業集団化における暴力と記憶」という報告で、社会主義期についての集会的記憶の問題を論じた。ヨルダッキ教授は、リードル教授、トレンチャーニイ教授と並んで、中央ヨーロッパ大学における本研究事業の推進の中心となり、今後も、本学と中央ヨーロッパ大学との共同研究の中核となることが期待される。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー／篠原琢（東京外国語大学）	0日	21日	0日	21日

招へい者⑩： 主任キュレーター

リディゲル氏は、国際文化研究所美術館の主任キュレーターの任にあり、現代ヨーロッパ史の美術的表象について研究を推進している。国際共同研究においては、美術的表象を通じた記憶の問題を扱った。

2016年3月に本学で行われた会議では、「歴史を再考する：ポーランド現代美術における集会的記憶と個人的記憶」という題目で報告を行ったほか、2月に国際文化センターで行われた国際会議では、「ポーランド現代彫刻における建築的次元」という報告を行った。それぞれ、現代美術を通じて、歴史意識、とくに現代史の経験に対する記憶の問題を扱った。ほかに、京都大学、および本学で国際ワークショップを行い、報告を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び	招へい期間	

日本側受入研究者（機関名）	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
国際文化センター、ポーランド／篠原琢（東京外国語大学）	0 日	15 日	0 日	15 日

招へい者⑩： 研究員

<p>ガルセク氏は、19 世紀、20 世紀ヨーロッパ政治思想を美術史・建築史と関連させながら研究を進める点で、非常にユニークな研究者であり、リディゲル研究員とともに、学問領域を横断して、ヨーロッパ史概念の批判的検討に貢献した。</p> <p>2016 年 3 月に本学で行われた国際会議では「スコピエ：未完の都市」と題する報告を、また 2016 年 2 月に国際文化センターで行われた国際会議では「困難なモダニズム：カトヴィツェの場合」という報告を行った。それぞれ、スコピエ（マケドニアの首都）、カトヴィツェ（ポーランドの工業都市）という特定の空間を取り上げることにより、社会主義の過去が建築・都市計画のモダニズムを通じて、どのように現代の都市空間に反映しているか論じたものであるが、美術史・建築史と歴史学とを横断して、本事業の研究活動に類例のない貢献を行った。ほかに、京都大学、および本学で国際ワークショップを行い、報告を行った。2016 年 8 月から 9 月にかけて行われた国際移動セミナー「シロンスク」では、その旅程、共同研究のテーマを準備し、途上のワークショップでシロンスクのプロテストантиズムや、20 世紀の都市計画・建築史について、報告を行った。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
国際文化センター、ポーランド／篠原琢（東京外国語大学）	0 日	15 日	0 日	15 日

招へい者⑪：教授

<p>本研究事業は、ヨーロッパの境界地域からヨーロッパ史を再構築することを目的としているが、ライアル教授は、イタリア・地中海世界の研究からこの課題に取り組んだ。ルネサンス期まで、ヨーロッパの知的・文化的中心でありながら、17 世紀以降周縁化される南欧地域の研究は、本研究事業の遂行にとって非常に重要であり、ライアル教授は、若手研究者の小田原琳准教授、久米順子准教授の事業推進にも多大な助力を行った。</p> <p>ライアル教授は、2016 年 5 月に行われた国際会議「帝国とナショナリズム」で、ジャドソン教授とともに基調報告を行い、ヨーロッパ周縁部における帝国秩序の問題について、研究事業に新しい領野を開いた。2017 年 2 月に行われた総括会議では、グローバル史における中心と周縁の問題について、批判的な報告を行い、本研究事業の成果を確認すると同時に、新しい課題を提示した。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
欧州大学院大学・歴史文明学部、イタリア 篠原琢（東京外国語大学）	0 日	0 日	14 日	14 日

招へい者⑬：教授

カルステン・ヴィルケ教授は、中央ヨーロッパのユダヤ文化・ユダヤ人史の専門家である。ヨーロッパ史の境界領域を考えるうえでユダヤ教徒・ユダヤ人の歴史は非常に重要であり、研究のさまざまな局面で、その問題に直面してきたが、研究の進展のなかで、ユダヤ文化・ユダヤ人史の専門家の協力が不可欠となり、中央ヨーロッパ大学歴史学部学部長のマティアス・リード教授、および本学との連絡窓口であるバラージュ・トレンチャーニ教授と協議して、ヴィルケ教授の新たに招聘を決めた。

ヴィルケ教授は、2016年3月に中央ヨーロッパ大学で開催された国際会議で、篠原の研究報告にコメントを行い、研究事業の方向性について助言を行った。2016年7月に京都大学と東京外国語大学で行われた国際会議で、それぞれ「ヨーロッパ・ユダヤ人史における東と西」、「オーストリア帝国におけるユダヤ人史」という報告を行い、境界領域としてのユダヤ人史というテーマについて、研究事業の枠組みを示した。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
中央ヨーロッパ大学・歴史学部、ハンガリー 篠原琢（東京外国語大学）	0日	0日	15日	15日

招へい者⑭：准教授

ヤン・ヘニングス准教授は、近世のヨーロッパとロシアの交渉史を専門としている。異なる法文化と政治的正統性に支えられているロシアとヨーロッパという二つの世界の交渉は、ヨーロッパ史の境界領域を検討する上で、非常に重要な主題である。ヘニングス准教授は、中央ヨーロッパ大学に本学から派遣された若手研究者と研究交流を行ったり、本研究計画によるブダペシュトのワークショップに参加するなどの実績があったため、本研究課題を総括する国際会議の開催にあたり、中央ヨーロッパ大学歴史学部学部長のマティアス・リード教授より推薦を受けて、招聘を行った。

ヘニングス准教授は、2017年2月に行われた総括会議で、実証研究に基づいて、ロシアとオスマン帝国との外交交渉に現れた法的規範の差異、相互認識の方法などについて、鮮やかにその実像を示した。この研究報告は、本研究事業を支える重要な具体的・実証的研究となった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
中央ヨーロッパ大学・歴史学部、ハンガリー 篠原琢（東京外国語大学）	0日	0日	11日	11日

資料3 国際共同研究の計画概要・方法

(1) 実施期間中における研究のスケジュールと実施内容の概要

研究事業中の国際会議・セミナーの実施状況は、それぞれの時期の研究の進展状況を示しているもので、「1. 派遣・招へいによる人的交流を通じて得られた成果の達成状況」もあわせて参照されたい。

H26年度

初年度は10月からプログラムが開始されたため、海外の連携研究機関との調整を行いながら、連携研究諸機関と研究課題・方法の共有のためのセミナーを本学と中央ヨーロッパ大学で1回ずつ行った。

H27年度

研究事業二年目は、研究者個々の共同研究からさらに進んで、研究推進上、連携研究機関を相互に結びつける事業が行われるようになった。国内で7回、国外で2回、本事業主催の国際会議、および国際セミナーを開催した。若手研究者、および研究分担者、連携研究者は、国際会議の開催にあわせて研究成果の報告を準備し、また当日の討論を通じて、研究の新たな展開の方向性を見出した。こうした会議の開催によって、機関連携、研究ネットワークの構築は大いに進展した。とりわけ年度末に東京外国語大学で行われた本事業と同名の国際会議「境界地域の歴史的経験から構築する新しいヨーロッパ史概念」は、事業全体の中間的総括として位置づけられ、近現代ヨーロッパ史における自由主義の見直しや、東欧社会主義の過去をヨーロッパ史の概念に有機的に組み込むにあたっての理論的・方法論的な見通しが得られた。会議は、国際文化研究所、中央ヨーロッパ大学から計4名の研究者を迎えて行われたが、これら二つの機関とは相互に国際会議が行われ、連携が非常に緊密になった。国外では、国際文化研究所で「内と外から見るヨーロッパ史」(2016年2月)、中央ヨーロッパ大学で「記憶の暴力・暴力の記憶」(2016年3月)という大規模な国際会議を開催することができた。これらの会議では、日本側研究者と連携研究機関の研究者の研究報告を通じて、研究上の相互交流が実現しただけでなく、研究事業計画全体の問題関心を連携研究機関の研究者と共有し、研究ネットワークの拡大・深化をはかることができた。

H28年度

最終年度の重要な事業活動は、本学で行われた国際会議、「帝国とナショナリズム」(5月)、国際文化センターと共同で行われた国際移動セミナー「ヨーロッパ境界地域の共有遺産研究：シロンスク/シュレージエン/スレスコ」(8-9月)、および東京外国語大学で行われた総括会議「ヨーロッパ史における中心・周縁再考」(2月)の3つである。「帝国とナショナリズム」は、従来、対抗的に考えられてきた「帝国」という枠組みとナショナリズム運動との相補・相関関係に光をあて、本研究の進展に大きく貢献した。国際移動セミナーは、国際文化センターのヤツェク・プルフラ所長、連携研究者のM.ヴィシニェフスキ博士、L.ガルセク博士、東京外大から4名の若手・共同研究者の参加を得て、10日間にわたって実施された。「境界地域」という概念をより洗練させることができた点で、本研究計画を方法論的に総括するのに非常に貴重な事業であった。総括会議は本学より3本、欧州大学院大学より2本、中央ヨーロッパ大学より3本の学術報告を得て、ヨーロッパ史を構成する概念を再検討し、新たな叙述の方向性を見出そうとする本研究計画の目的に十分に接近することができた。この総括会議では、ヨーロッパ史の概念を再考するという課題ののちに、世界史の新しい叙述法を検討する、という本事業を発展させた次の事業課題の見通しも示された。このほか、本学で2回、および神戸大学、京都大学で各1回、欧州大学院大学で2回、個別研究の成果を確認・公表する国際セミナーが行われた。国内の他大学で行われたセミナーは、本研究事業に、関連する国内の研究者の参加を促し、研究ネットワークを拡大・充実させることに役立った。

個別研究の進展のなかで、近世の知と経験の循環を立体的に検討するために新たな史料群の利用が試みられたことや、民衆世界におけるナショナリズムの問題を考えるために、従来利用されていなかった史料群を用いた研究が進展したことも大きな成果だった。

(2) 成果の概要

本研究は、東部ヨーロッパ、および地中海地域を中心とするヨーロッパ境界地域の歴史的経験に焦点を当てながら、共同研究によって新たなヨーロッパ史の概念を構築することを目的として掲げ、従来のヨーロッパ研究の問題点として次の三点をあげた。①目的論的歴史像の克服。②国民的学術研究の束としてのヨーロッパ史の批判的再検討。③東と南の境界地域の経験のヨーロッパ史への有機的包含。それらは個別のテーマを扱いながら、この三点を批判的に検討するという課題を基底にして、個別研究、国際会議・セミナーの開催が推進された。計画・実施された。この結果、研究事業の全体像が連携研究機関の研究者にも共有され、研究の積み上げが可能となった。初年度は、主に日本側の研究者と連携研究機関の研究者との個別の交流を基礎に研究協力が行われる段階、二年度は、研究事業の全体像が連携研究機関の研究者にも共有され、研究の積み上げが可能となり、かつ研究機関どうしの面的な研究協力が進んだ段階、そして最終年度は、研究事業全体が共有され、研究成果があげられた段階として総括することができる。2016年3月に本学で行われた国際会議は、上にあげた課題を正面から取り上げ、理論的・方法論的な見通しを得ることができた。会議では、研究事業全体にかかわる問題提起に続いて、第一部「ヨーロッパ近代におけるリベラリズム再考」、第二部「ヨーロッパにおける文化遺産と歴史意識」というセクションを設定した。第一部では「目的論的歴史像」を支える自由主義的歴史像の再検討を行い、第二部では、現代史における「記憶の政治」の課題を論じた。2017年2月に行われた総括会議は、この成果を継承しながら、ヨーロッパ史における近代の再考、グローバル史におけるヨーロッパ史の位置付けを論じて、「ヨーロッパ史概念の再構築」という研究課題に、理論的・方法論的、そして実証的に接近することができた。

(3) 本事業を契機として新たに始まった国際共同研究

(件)

合計	うち、相手先機関以外
4	0

資料4. 共同研究成果の発表状況

① 学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文又は著書

<p>論文名・著書名 等 (以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。 ・本事業の研究成果で、DP(ディスカッション・ペーパー)、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるものも、3件以内で付記することができます。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・著者名について、責任著者に「※」印を付して下さい。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者には<u>下線</u>、派遣した若手研究者には<u>波線</u>、海外の主要連携研究者には<u>斜体・太下線</u>、連携研究者には<u>斜体・破線</u>を付して下さい。 ・共同研究の相手側となる海外の研究機関との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文については番号の前に「○」印を付して下さい。速報性のあるものについては番号の前に「□」印を付して下さい。 ・当該論文の被引用状況について特筆すべき状況があれば付記して下さい。 ・上記のうち、主な発表論文のコピー(A4版)を2件以内で添付し、添付したコピーの表紙等の右上にそれぞれに「事業番号」を記入するとともに、当該論文の番号の前に「★」印を付して下さい。 	
1	篠原琢「「ユダヤ文化」の復興?——ポーランドにおける多文化社会の再構築の試み」、長谷部美佳・受田宏之・青山亨編著『多文化社会読本——多様な世界、多様な日本』東京外国語大学出版会、2016年、56-74頁、査読なし。
2	篠原琢「市民社会」および「ネイション」、南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵責任編集『新しく学ぶ西洋の歴史——アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、131-132、156-157頁、査読なし。
3	篠原琢「ヨーロッパ史をどう書くか、20世紀史をどのように描くか—マーク・マゾワの著作をめぐって—、『歴史学研究』946号、2016年10月、55-61、64頁、査読なし
4	Taku SHINOHARA, “Vytváření národně politické kultury v Čechách v letech 1848-1868: Pokus o přemostění mezi sociální a kulturní historií,” Ph. D. 学位請求論文, カレル大学(プラハ)哲学部, 2015年8月学位授与。
5	篠原琢「「国民の社会」をどのように把握するか」、『日本歴史学協会年報』no.31、2015年、59-65頁、査読なし。
6	金井光太郎「カリフォルニア大リバーサイド校に見る歴史授業のアクティブ化」、『科学研究費基盤B 地域研究に基づく「世界史」教育の実践的研究 報告書』、2016年、94-102頁、査読なし。
7	金井光太郎、「アメリカ共和政の試練—人民の同意と主権者人民」遠藤泰生編『近代アメリカの公共圏と市民：デモクラシーの政治文化史』、東京大学出版会、59-88ページ、2017年5月、査読なし。
8	KANAI, Kotaro, “From Frontier Theory to Borderland History: Native American Violence and Violence of the Frontier Theory”, 『東京外国語大学論集』第93号(2016)、207-218頁、査読なし。
9	千葉敏之「寓意の思考——魚から見た中世ヨーロッパ」、近藤和彦編『ヨーロッパ史講義』山川出版社、2015年、32-54頁、査読なし。
10	千葉敏之「神聖ローマ帝国と「世界」」、南塚・秋田・高澤責任編集『新しく学ぶ西洋の歴史——アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、12-13頁、査読なし。
11	相馬保夫「ドイツにおける「外国人労働者」問題と多言語・多文化社会化」、長谷部・受田・青山編『多文化社会読本』東京外国語大学出版会、2016年、20-30頁、査読なし。

12	相馬保夫「離散と抵抗：ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織（17）」、『東京外国語大学論集』93号、2016年12月、111-129頁、査読なし
13	相馬保夫「離散と抵抗：ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織（16）」、『東京外国語大学論集』90号、2015年、57-77頁、査読なし。
14	Yukiko TATSUMI, “Russian Critics and <i>Obshchestvennost'</i> , 1840-1890: The Case of Vladimir Stasov,” Yasuhiro MATSUI (ed.), <i>Obshchestvennost' and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia: Interface between State and Society</i> , London: Palgrave Macmillan, 2015, pp.16-33, 査読あり。
15	巽由樹子「帝政末期ロシアの官僚と出版」、池田嘉郎・草野佳矢子編『国制史は躍動する：ヨーロッパとロシアの対話』、刀水書房、2015年、188-208頁、査読なし。
16	巽由樹子「帝政末期の社会とツァーリの表象」『ロシア革命とソ連の世紀 第1巻』、岩波書店、2017年6月、85-86頁、査読なし。
17	福嶋千穂「スラヴとバルトの混交域——古ルーシの諸公国とリトアニア大公国」、服部倫卓・越野剛編『ベラルーシを知るための60章』（仮題）、明石書店、2017年刊行予定、頁数未定、査読なし
18	福嶋千穂「「両国民の共和国」の時代——ポーランド・リトアニア国家のもとで」、服部倫卓・越野剛編『ベラルーシを知るための60章』（仮題）、明石書店、2017年刊行予定、頁数未定、査読なし
19	福嶋千穂『ブレスト教会合同』（ポーランド史叢書1）、群像社、2015年、132頁。
20	鈴木健太「独立への過程と「十日戦争」——ユーゴスラヴィアからスロヴェニアへ」、柴宜弘・アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編『スロヴェニアを知るための60章』、明石書店、2017年刊行予定、頁数未定、査読なし
21	鈴木健太「書評：マーク・マゾワー著／中田瑞穂・網谷龍介訳『暗黒の大陸——ヨーロッパの20世紀』（未来社、2015年12月）」、『東欧史研究』（東欧史研究会）、39号、2017年3月、93-100頁、査読なし
22	鈴木健太「1987年セルビアの党内論争とナショナリズムをめぐる議論——パラチン事件とセルビア党中央委員会第8回総会」、『東欧史研究』（東欧史研究会）第38号、2016年、3-24頁、査読あり。
23	鈴木健太「ミロシェヴィチ政権とナショナリズムの高まり——「統一」の達成とその論理」、柴宜弘・山崎信一編『セルビアを知るための60章』明石書店、78-82頁、2015年、査読なし。
24	鈴木健太「首都ベオグラード——セルビア／南スラヴの都となった要塞の町」、柴・山崎編『セルビアを知るための60章』明石書店、158-162頁、2015年、査読なし。
25	鈴木健太「ジェルダップ峡谷——多彩な顔をもつ最大の国立公園」、柴・山崎編『セルビアを知るための60章』明石書店、196-199頁、2015年、査読なし。
26	鈴木健太「連邦解体とユーゴスラヴィア紛争——民族の自決と「セルビア人問題」」ほか、柴・山崎編『セルビアを知るための60章』明石書店、83-87、96-101、132-138、308-313頁、2015年、査読なし。
27	伊東剛史「痛みは普遍的なのか——『痛みと感情のイギリス史』から考える」、『Pieria（ピエリア）』、8号、2017年4月、pp. 64-65、査読なし

28	Takashi ITO, “Flying Penguins in Japan’s Northernmost Zoo” Tracy McDonald and Daniel Vandersommer (eds), <i>Zoo studies and a new humanities</i> , Toronto: Toronto UP, forthcoming, 査読あり
29	伊東剛史「【書評】 Sarah Amato, <i>Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture</i> , Toronto: University of Toronto Press, 2015」『ヴィクトリア朝文化研究』、14号、2016年11月、70-72頁、査読なし
30	伊東剛史「【書評】勝田俊輔・高神信一(編)『アイルランド大飢饉——ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』(刀水書房、2016年)」、『科学史研究』281号、2017年4月、70-72頁、査読なし
31	伊東剛史・後藤はる美編『痛みの文化史——イギリス史のなかの苦痛と共感』東京外国語大学出版会、2016年(担当:「プロローグ」、第6章「観察——ダーウィンと生体解剖論争」、「解題」(後藤はる美との共著))。
32	伊東剛史「コラム12:自然と人間」、南塚・秋田・高澤責任編集『新しく学ぶ西洋の歴史——アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、133頁、査読なし。
33	Takashi ITO, “The State and the Popularisation of Science in Victorian Britain: The Scientific and Literary Societies Act of 1843,” <i>Historia Scientiarum</i> 25 (2016), 37pp.
34	伊東剛史「19世紀のロンドン動物学協会からみた動物学の専門分科」、『化学史研究』43巻2号、2016年6月、102-103頁
35	伊東剛史「ダーウィン著『種の起源』」、池田嘉郎他編『名著で読む世界史120』山川出版社、2016年12月、309-311頁。
36	伊東剛史「「食べられるために存在しているのだろうか?——今から180年前のロンドン動物園で、はじめてキリンを見た人びとが考えたこと」、『市民ZOOネットワーク ニュースレター』41号、2016年、6-9頁。
37	伊東剛史、「書評: Ian Jared Miller, <i>The nature of the beasts: empire and exhibition at the Tokyo Imperial Zoo</i> , Berkeley: University of California Press, 2013」、『科学史研究』277号、2016年4月、388-389頁。
38	Takashi ITO, “Review: Lisa Uddin, <i>Zoo Renewal: White Flight and the Animal Ghetto</i> , Minneapolis: University of Minnesota Press, 2014”, <i>Humanimalia: A Journal of Human/Animal Interface Studies</i> 7/2 (2016), pp. 154-160.
39	小田原琳「書評: 大内裕和・竹信三恵子『全身〇活時代』青土社、2014年」、女性史総合研究会女性史学編集委員会『女性史学年報』25号、2015年、104-107頁、査読なし。
40	Rin ODAWARA, “Violence against women and the racist discourse during the WWI in Italy,”『グアドランテ』、19号、2017年3月、9-16頁、査読あり
41	小田原琳「〈境界〉を創りだす力——南イタリアから立てる近代への問い」、東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のために——現在をどう生きるか』、岩波書店、2017年3月、203-221頁、査読なし
42	小田原琳・後藤あゆみ訳、シルヴィア・フェデリーチ著『キャリバンと魔女』、以文社、2017年2月
43	小田原琳「平和の犯罪」としての戦時・植民地主義ジェンダー暴力——イタリア歴史学における研究動向」、『ジェンダー史学』、12号、2016年10月、81-91頁、査読あり

44	小田原琳「経験の後に書かれる歴史へ——イタリア歴史学におけるレジスタンス神話と修正主義」、『日本の科学者』、51号、2016年8月、30-35頁、査読なし
45	久米順子「西ゴート王国（1）アリウス派時代」「西ゴート王国（2）カトリック時代」、立石博高、内村俊太編（久米ほか11名著）『スペイン史を知るための50章』、明石書店、2016年10月、33-44頁、査読なし
46	Junko KUME, “Reconsideraciones del arte medieval español durante el siglo XX: lo «mozárabe» y lo «mudéjar»,” M. Cabañas Bravo, W. Rincón García (eds), <i>El arte y la recuperación del pasado reciente</i> , Madrid, 2016, pp. 123-132, 査読なし
47	久米順子「中南米の西洋中世学」、『西洋中世研究』、8号、2016年12月、229-242頁、査読あり
48	久米順子「ロマネスク壁画の収集・保全とカタルーニャ美術館」、木下亮編著『バルセロナ——カタルーニャ文化の再生と展開』（西洋近代の都市と芸術第6巻）、竹林舎、2017年、161-181頁、査読なし
49	Junko KUME, G. Rodríguez, M. Zapatero, “Historia y Memoria”, Scriptorium (Pontificia Universidad Católica Argentina), 10 (2016), pp. 36-40, 査読なし
50	久米順子訳、イサーク・アイト・モレーノ著『『美術館』の芸術家たち——ベラスケスと20世紀の美術におけるその影響』、豊田唯、坂本龍太編『ベラスケスとバロック絵画：影響と同時代性、受容と遺産：公開国際シンポジウム報告集』、ベラスケスシンポジウム事務局：早稲田大学文学学術院美術史コース室、2016年11月、63-68頁
51	久米順子「トルデシーリャス再訪」、『地中海学会月報』、396号、2017年1月、5頁、査読なし
52	Junko KUME, “Escribanos e iluminadores de la frontera cristiana hispana entre los siglos X y XI: la costumbre del retrato” (en castellano), M. F. Ríos (ed.), <i>El mundo de los conquistadores</i> , Madrid, 2015, pp. 839-859, 査読あり.
53	Junko KUME, “Obras de arte en torno a la translatio s. Isidori legionem anno 1063,” G. Rodriguez, G. Coronado Schwindt (eds.), <i>Formas de abordaje del pasado medieval</i> , Mar del Plata, 2015, pp. 40-75, 査読なし.
54	Junko KUME, “Arte cristiano en el Toledo conquistador,” G. Rodriguez, G. Coronado Schwindt (eds.), <i>Formas de abordaje del pasado medieval</i> , Mar del Plata, 2015, pp. 76-96, 査読なし.
55	久米順子「スペイン料理——海と大地と太陽の恵みを食べる」、沼野恭子編『世界を食べよう』東京外国語大学出版会、2015年、176-181頁、査読なし。
56	久米順子（共訳）、三菱一号館美術館、読売新聞社編『プラド美術館展——スペイン宮廷美への情熱』（展覧会カタログの作品解説・作家解説翻訳）、2015年、179-180, 184-186, 188-189, 199-203, 206-209, 212-218, 221頁。

② 学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)</p> <p>(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <p>・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、主たる発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者には<u>下線</u>、派遣した若手研究者には<u>波線</u>、海外の主要連携研究者には<u>斜体・太下線</u>、連携研究者には<u>斜体・破線</u>を付して下さい。</p> <p>・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。</p> <p>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</p> <p>・共同研究の相手側となる海外の研究機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。</p>	
1	Taku SHINOHARA, "Europe as a canon and obsession in its borderlands," 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京(東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
2	Taku SHINOHARA, "Europe as a canon and obsession in its borderlands," 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京(東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
3	Taku SHINOHARA "Defining public sphere by organic boundaries: Syncretism in creating national culture in 19th century Habsburg Monarchy", 欧州大学院大学歴史文明学部, 2017年12月5日, 口頭発表, 審査なし
4	Taku SHINOHARA "Transformation of Barok Festivity into National Culture in Nineteenth Century Bohemia", Entangled Interactions between religions and national identities in the space of the former Polish-Lithuanian Commonwealth (2016年8月22-23日), リトアニア歴史学研究所(ヴィリニウス, リトアニア), 口頭発表, 審査なし
5	Taku SHINOHARA, "Jewish Presence and Non-presence in the Memory Politics of the Czech Republic," 2015 SRC Winter International & SRC 60th Anniversary Symposium "Between History and Memory: Connecting the Generations at SRC 60," 2015年12月, スラブ・ユーラシア研究センター, 口頭発表, 審査なし.
6	Taku SHINOHARA, "Jewish Existence and Non-existence in the Memory Politics in Central Europe," Polish-Japan Research Seminar "Europe Seen from Abroad" (本研究事業による国際会議), 2016年2月, 国際文化センター(クラクフ), 口頭発表, 審査なし.
7	Taku SHINOHARA, "Canonization of Jewish Memory in Central Europe," The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University "The Violence of Memory and the Memory of Violence" (本研究事業による国際会議), 2016年3月, 中央ヨーロッパ大学(ブダペスト), 口頭発表, 審査なし.
8	Taku SHINOHARA, "Liberalism in German Historiography in Bohemia," 「Constructing a New Concept of European History from Historical Experiences of Borderlands」(本研究事業による国際会議), Part 1: Liberalism Reconsidered in the European Modernity, 2016年3月, 東京外国語大学府中キャンパス(東京), 口頭発表, 審査なし.
9	金井光太郎「アメリカの洗練化とコスモポリタニズム」, 科研研究会(課題名「コスモポリタニズムと秩序形成——ブリテン世界における近代的イシュー」), 2015年5月, 東洋大学白山キャンパス(東京), 口頭発表, 審査なし.

10	<u>Kotaro KANAI</u> , “The Making of a Frontier: Native American Violence and the Violence of the North American Frontier,” The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University “The Violence of Memory and the Memory of Violence,” 2016年3月, 中央ヨーロッパ大学(ブダペスト), 口頭発表, 審査なし.
11	<u>Yasuo SOMA</u> , “A Comment on Constantin Iordachi “Violence and Memory in the Process of Land Collectivization in Romania, 1949-1962,” ” The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University “The Violence of Memory and the Memory of Violence,” 2016年3月, 中央ヨーロッパ大学(ブダペスト), 口頭発表, 審査なし.
12	<u>福嶋千穂</u> 「17世紀ポーランド・リトアニアにおける殉教事件」、東欧史研究会 2016年度第2回例会、2016年7月、東京(東京外国語大学本郷サテライト)、口頭発表, 審査なし
13	<u>Chiho FUKUSHIMA</u> , “Uniate martyr Josaphat and His Role as a Confessionalizing/Nationalizing Element,” Summer International Symposium 2016 in Vilnius “Entangled Interactions between Religions and National Identities in the Space of the Former Polish-Lithuanian Commonwealth,” 2016年8月, Lithuanian Institute of History (ヴィリニウス、リトアニア), 口頭発表, 審査なし
14	<u>Chiho FUKUSHIMA</u> , “Unia kościelna w Rzeczypospolitej Obojga Narodów i jej ślady w dzisiejszej Polsce,” Spotkania polonistyk trzech krajów - Chiny, Korea, Japonia: V Międzynarodowa Konferencja Akademicka 2016 Kanton, 2016年11月, 広東外語外貿大学(広州、中国), 口頭発表, 審査なし
15	<u>Chiho FUKUSHIMA</u> , ““Rus” between Poland and Russia: Concerning problematics in the Terminology in Japan,” Polish-Japan Research Seminar “Europe Seen from Abroad” (本研究事業による国際会議), 2016年2月, 国際文化センター(クラクフ), 口頭発表, 審査なし.
16	<u>鈴木健太</u> 「1980年代末ユーゴスラヴィアの大衆運動の展開と構図——セルビアとスロヴェニアにおける事例の比較とナショナリズムの再検討」、第66回日本西洋史学会大会自由論題報告、東京(慶応義塾大学)、2016年5月、口頭発表、審査あり
17	<u>鈴木健太</u> 「1980年代末ユーゴスラヴィアにおける政治社会の変動と連邦党指導部——大衆運動とナショナリズムをめぐる相違と対立」、第6回特別研究員研究会(東京外国語大学海外事情研究所)、東京(東京外国語大学府中キャンパス)、2016年12月、口頭発表、審査なし
18	<u>Kenta SUZUKI</u> , “Yugoslavia and the collapse of communism in Eastern Europe: Mass movements and the intra-party confrontations in the socialist federation in late 1988,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京(東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
19	<u>Kenta Suzuki</u> , “Rethinking Popular Movements in Socialist Yugoslavia in the Late 1980’s: The Role of “Narod” in the Development of Political Participation in Vojvodina and Serbia,” Polish-Japan Research Seminar “Europe Seen from Abroad” (本研究事業による国際会議), 2016年2月, 国際文化センター(クラクフ), 口頭発表, 審査なし.

20	伊東剛史「19世紀のロンドン動物学協会からみた動物学の専門分科」、科学史研究発表会(年会)シンポジウム「近代イギリスにおける科学の制度化——専門分科と公共圏」、津(三重大学)、2016年7月、口頭発表、審査なし
21	伊東剛史「歴史的に読み解く「英国EU離脱」」、東京外語会主催文化講演会、東京(東京外国語大学本郷サテライト)、2016年10月、招待講演
22	Takashi ITO, "Penguin Parade and Flying Seals: "The Cult of the Cute" in Japan's Northernmost Zoo," Panel on "Zoos and global history," 131st Annual Meeting, American Historical Association, デンバー(アメリカ合衆国), 2017年1月、口頭発表、審査なし
23	Takashi ITO, "Postmodern nature in Japan's northernmost zoo," 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京(東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月、口頭発表、審査なし
24	Takashi ITO, "Playing by their own rules: gentleman menageries and the Zoological Society of London in Victorian Britain," International Workshop on the Institutionalisation of Science and the Public Sphere in Modern Britain, 愛知(愛知県立大学), 2017年3月、口頭発表、審査なし
25	Takashi ITO, "Weeping elephants, Charles Darwin and the Vivisection Controversy: A Cultural History of "Embodied Pain" in Victorian Britain," Polish-Japan Research Seminar "Europe Seen from Abroad" (本研究事業による国際会議), 2016年2月、国際文化センター(クラクフ), 口頭発表、審査なし.
26	伊東剛史「眠れぬ夜の苦しみ——ダーウィンと生体解剖論争」、第25回イギリス女性史研究会・シンポジウム「女性と動物——動物の苦痛への共感から反生体解剖運動へ」、2015年12月、甲南大学・ネットワークキャンパス東京(東京)、口頭発表。
27	伊東剛史「コスモポリタニズムとエコロジー的近代——19~20世紀転換機のオーストラリアにおける外国人排斥運動と自然保護運動」、科研研究会(課題名「コスモポリタニズムと秩序形成——ブリテン世界における近代的イシュー」)、2015年8月、東洋大学(東京)、口頭発表。
28	伊東剛史「ゾウの涙——ダーウィンの感情研究と生体解剖論争」、近世イギリス史研究会・シンポジウム「近代イギリスにおける痛み」、2015年6月、東洋大学(東京)、口頭発表。
29	伊東剛史「擬人化と馴致——ヴィクトリア期ロンドン動物園の《domesticity》」、歴史学研究会近代史部会例会、2015年4月、早稲田大学(東京)、口頭発表。
30	伊東剛史「黎明期のロンドン動物園」、市民ZOOネットワーク3月セミナー、2016年3月、東京外国語大学(東京)、講演。
31	Takashi ITO, "A Comment on Emese Lafferton "Violation of Mind and Body: The Experimental Culture of Hungarian Psychiatry around 1900," The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University "The Violence of Memory and the Memory of Violence," 2016年3月、中央ヨーロッパ大学(ブダペスト), 口頭発表、審査なし.

32	伊東剛史「コメント：川崎明子『ブロンテ小説における病いと看護』（2015）合評会」、医療・文化・社会研究会、2015年6月、慶應義塾大学（東京）、口頭発表。
33	Rin ODAWARA, “Comment on Lucy RIALI, “How Global was European Colonialism?,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京（東京外国語大学府中キャンパス）, 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
34	小田原琳「シルヴィア・フェデリーチ『キャリバンと魔女』を読む」、ワークショップ「魔女とナウトピア——脱資本主義のパラレルワールド」、東京（東京外国語大学府中キャンパス）、2017年2月、口頭発表、審査なし
35	Rin ODAWARA, “La divisione del lavoro di genere e la nuova strategia dei lavoratori stranieri in Giappone,” “Generi a colori: proposte formative per comunità multiculturali,” Biblioteca Comunale (コモ、イタリア), 2016年5月, 口頭発表, 審査なし
36	Rin ODAWARA, “Time of the “Realm of Mothers” : Mother-and-Child Discourse in Social Movements in Japan and Historical Time,” Workshop “The Work of Post-War” , 2015年12月, ニューヨーク大学（ニューヨーク）, 口頭発表, 審査なし.
37	Rin ODAWARA, “Violence against Women and the Racial Discourse in the WWI in Italy,” Workshop “Boundary Demarcation in the 19-20th Centuries in Alpine-Adriatic Borderlands,” 2016年3月, 欧州大学院大学（フィレンツェ）, 口頭発表, 審査なし.
38	Rin ODAWARA, “Violence against Women and the Racial Discourse in the WWI in Italy,” The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University “The Violence of Memory and the Memory of Violence,” 2016年3月, 中央ヨーロッパ大学（ブダペスト）, 口頭発表, 審査なし.
39	Junko KUME, “How to name the past: Some debates in Modern Spain about Medieval Art History”, Department of History and Civilization colloquium “Art politics and art history in 20th century Spain,” 欧州大学院大学（フィレンツェ）、2016年12月、口頭発表、審査なし
40	Junko KUME, “El ‘Arte mudéjar’ en la historia del arte español: en busca de una identidad,” XVIII Jornadas Internacionales de Historia del Arte ‘Imaginarios en conflicto: “Lo español” en los siglos XIX y XX,’ スペイン高等科学研究院（マドリード）、2016年9月、口頭発表、招待
41	Junko KUME, “Donde viven los monstruos. Miradas desde el rincón,” Summer Course, XXI Cátedra de los estudios medievales del Comtat d’Urgell, バラゲー（リエイダ県ノゲーラ郡、スペイン）2016年7月、講演、招待
42	Junko KUME, “Formation and Development of the Historiography of ‘Mudéjar Art’ in Spanish Art History,” The 6th International Medieval Meeting Lleida, リエイダ大学（リエイダ、スペイン）, 2016年6月, 口頭発表, 審査あり
43	Junko KUME, “Obras de arte en torno a la translatio s. Isidori legionem anno 1063,” VI Simposio Internacional “Texto y contextos: diálogos entre Historia, Literatura, Filosofía y Religión”（第6回国際シンポジウム「テキストとコンテキスト——歴史、文学、哲学、宗教間の対話」）, 2015年4月, マル・デル・プラタ国立大学（ブエノスアイレス）, 口頭発表, 審査なし.

44	Junko KUME, “Arte cristiano en el Toledo reconquistado,” Seminario de Posgrado “El taller del historiadores: el abordaje de fuentes medievales” (マル・デル・プラタ国立大学大学院特別セミナー「歴史家たちのアトリエ——中世史料へのアプローチ」), 2015年4月、マル・デル・プラタ国立大学 (ブエノスアイレス)、口頭発表、招待。
45	Junko KUME, “Construccion y consolidacion de la historia del arte medieval espanol,” II Coloquio Internacional “La Edad Media vista desde otros horizontes: problemas teoricos y metodologicos” (第2回国際コロキウム「異なる視野から見たヨーロッパ中世——理論と方法論の諸問題」), 2015年4月、マル・デル・プラタ国立大学 (ブエノスアイレス)、口頭発表、招待。
46	久米順子「中世スペインのキリスト教美術にみるムスリムとイスラームの表象」、美学会全国大会シンポジウム III「歴史の事実と絵画の真実：文字史料と画像史料をめぐって」、2015年10月、早稲田大学文学学術院 (東京)、口頭発表、招待。
47	Junko KUME, “The “Discovery” of Medieval Art and the Formation of National Identities: The Case of 19th Century Catalonia,” Polish-Japan Research Seminar “Europe Seen from Abroad” (本研究事業による国際会議), 2016年2月、国際文化センター (クラクフ)、口頭発表、審査なし。
48	Junko KUME, “A Comment on Oskana Sarkisova, “Traces: The Memories of State Violence and Domestic Photography. The Novocherkassk Case,” The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University “The Violence of Memory and the Memory of Violence,” 2016年3月、中央ヨーロッパ大学 (ブダペスト)、口頭発表、審査なし。